

日露関係から見た伊藤博文暗殺

— 両国関係の危機と克服

麻田 雅文*

The Ito Hirobumi Assassination From the View Point of Russo-Japanese relations:
The Related Dangers and Improvement of Their Relations

ASADA Masafumi

要旨

本論は1909年10月にハルビンで起きた伊藤博文の暗殺事件を論じる。この事件は、伊藤がロシアのココフツォフ大蔵大臣との会談のためハルビンを訪れた矢先に起きた。伊藤の暗殺が及ぼした政治的影響について、日本では大韓帝国の併合が断行されるに至るターニングポイントとして論じられることが多い。しかし本論はハルビンでの会談前後の日露関係と、この事件が日露関係に及ぼした動揺とその終息について論じる。

両者の会談が設定された経緯は、日露双方の主張が大きく食い違っている。いずれにせよ、両者の会談はかなり急に設定されたもので、蔵相の極東視察は伊藤の希望が伝達される前から決まっていた、別の目的があったことは確かである。ココフツォフの視察は中東鉄道や自由港制、国防力強化など内政上の課題のためであった。一方の伊藤が駐日ロシア大使に語ったのは、会談により日露関係をより深めたい、という事であった。暗殺の瞬間については、事件現場に居合わせた4人のロシア人がそれぞれ書き残しており、貴重な記録であるが、日本で紹介されるのはこれが初めてである。

当時の日露関係は両国の軍人たちに不信感があることから良好とは言いがたかった。こうした中で起きた事件はロシア側にとって青天の霹靂であって、本気で戦争の心配をする者たちもいた。しかし、日本政府が自重し、新聞の論調がロシアの責任を問わなかったことは、ロシア政府内の対日協調派にとって有利な状況を作りだした。こうして、日露両国は事件の責任追及を棚上げした上で、東北アジアにおける権益の確保をより確かなものにするため、日露協定のさらなる強化に邁進する。

キーワード：伊藤博文、安重根、ヴラディミール・ココフツォフ、中東鉄道、日露関係史

Keywords：Ito Hirobumi, An Jung-geun, Vladimir Nikolayevich Kokovtsov, The Chinese Eastern Railway, History of Japan-Russia Relations

目次

1. はじめに
2. ハルビンにおける会談の設定と両国の思惑
 - 2.1. 会談の設定
 - 2.2. ココフツォフの目的

*日本学術振興会特別研究員 PD (首都大学東京)

- 2.3. 伊藤の使命
- 3. 事件前後の動向
 - 3.1. ハルビン 駅へ
 - 3.2. 事件当日
 - 3.3. 事件後の焦点
- 4. 日露関係への事件の波紋
 - 4.1. 対日警戒派の恐慌
 - 4.2. 対日協調派の努力
- 5. おわりに

1. はじめに

21世紀に入って、日本における日露関係史の研究は新局面に入った。その理由として、第一に日露関係史を双方の一次史料に基づいて見直すマルチアーカイブの手法が確立したこと、第二にロシアからの研究者や留学生による日露関係史の業績が日本で公刊されるようになったことがあげられる。特に、日露戦争後からロシア革命前までについては年々研究の層が厚くなっている(注1)。そもそも外交史とは関係各国の史料を相互参照することを要求する分野だが、ソ連時代には互いの文書館を訪ねるのは至難であったし、殊にソ連では外交史といえどもイデオロギーとは無縁でいられなかった。日露双方の一次史料を踏まえて結論を導き出すという、オーソドックスな外交史は難しい状況が続いていたのである。現在ですら、モスクワのロシア帝国外交史料館(АБПИИ)で閲覧許可を得るのは、他の文書館と比べても容易ではない。日本側がアジア歴史資料センター(JACAR)で積極的に戦前の史料を公開しているのに比べると、ロシアの外交文書館の閉鎖性は際立っていると言わざるを得ない。一方、日本側の問題点としては、日本外交史の研究者でロシア語文献を活用できる人材が乏しいことがあげられる。また日本の歴史研究に特有の日本史、東洋史、西洋史という講座制の壁も跨境的な研究を難しくしている。しかしそうした制約も意欲的な研究者の前では障害ではなくなりつつあり、研究の環境は明らかに改善されてきた今、日露の外交史研究は遅れを取り戻すかのように新しい業績が積み上げられている。

本論はそうした中でも、日露関係史の中では省みられていない重要な事件を取り上げたい。それは1909年10月26日にハルビンで起きた伊藤博文暗殺事件である。伊藤の暗殺が与えた政治的影響について、日本では大韓帝国の併合が断行されるに至るターニングポイントとして論じられることが多かった。そのため、伊藤のハルビン行きも日韓併合を推進するため、という憶測は根強いものがある(注2)。近年では、それと対抗するように、併合に慎重だった伊藤が、日本陸軍と右翼を中心とした併合促進派に謀殺されたのではないか、という説も喧しい(注3)。本論は、日韓関係や真犯人探しとは異なる角度から彼の暗殺を考察するために、ハルビンで会談が設定された経緯と、日露関係にこの事件が及ぼした動揺と、その収束について、主にロシア側か

ら論じてみたい。伊藤が日露戦争前からロシアとの提携を模索していたことはよく知られている。同じ長州閥であっても、山縣有朋は田中義一に作成させた 1907 年の「帝国国防方針」で、仮想敵の筆頭にロシアを挙げさせていたのとは対照的だ。これに対しロシアでは、暗殺の現場に居合わせたヴラディミール・ココフツォフ大蔵大臣（注 4）のほか、アレクサンドル・イズヴォリスキー外務大臣（注 5）が対日協調派と呼べる存在であった。しかし対日警戒派もヴラディミール・スホムリーノフ陸軍大臣（注 6）や、ロシア極東を預かるパーヴェル・ウンテルベルグ^{フリ}沿アムール総督（注 7）を始めとして、軍上層部で根強い支持を集めていた。こうした中で起きた伊藤の暗殺事件が、いかに日露関係へ影響したのか考察するのは、伊藤博文という政治家の最後の仕事を考える上でも、とかくストルイピン改革ばかり注目されがちな当時のロシアの内政を考える上でも、有益であろうと仮定される。

次に先行研究と史料について触れておこう。ロシアではこの事件につき論文と著作がそれぞれ一つずつある。論文はサンクトペテルブルグ大学の研究者ニコライ・サモイロフの「ハルビンでの安重根の発砲——ロシアの視点から」[Самойлов 1997] である。この論文では安重根に焦点を当てて、彼がどう暗殺を執行し、事件後に日本に引き渡されたのかを論じている。もう一点はボリス・パクの『ハルビン駅における復讐』[Пак 1999] である。ロシアの史料をほぼ網羅した上で執筆されたパクの著作も安重根に焦点を当てている。日本語文献が用いられず、ロシア側の動向に記述の中心が置かれ、当時の朝鮮の置かれた立場から、伊藤に対して辛辣なのは共通する。当時の日露関係が日韓併合を考える上で重要なことは、すでに石和静が論証している。しかし伊藤のハルビン行きについては「米露の提携を事前に遮断、日露のアンタントを確保することが主な目的であった」[石 2003 : 27] として、それ以上の分析はなされていない。むしろ石は、伊藤の暗殺で日露「両国の接近が圧力を受けたのは事実だが、彼の死によって日本が韓国併合をすることになった視点は是正されなければならないだろう」[石 2003 : 32] と、事件を日韓関係から読み解く方に重点を置いている。他方、日露関係史の分野では、この事件は単なる一エピソードの扱いしか受けてこなかったが、近年ワシーリー・モロジャコフが『後藤新平と日露関係史』で 3 頁を割いて論じている。彼はその中で、伊藤の暗殺で日露「両国間の関係が悪化することはなかった」[モロジャコフ 2009 : 44] と結論付けているが、その理由は明らかにされておらず、論証は不十分である。石とモロジャコフが用いた史料はロシア帝国外交史料館の一次史料と英語の二次文献である。本論もロシア帝国外交史料館の史料を用いているが、その史料は北海道大学が所蔵するレンセンコレクションのコピーを用いた（注 8）。また先行研究では用いられていない新史料として、サンクトペテルブルグにあるロシア国立歴史文書館（РГИА）の中東鉄道 фонд や、スタンフォード大学フーヴァー研究所の史料でもロシア側の動向を見てゆく。日本側は、アジア歴史資料センターと外務省外交史料館の一次史料を用いた。

本論の章立ては以下のとおりである。第 2 章では、ココフツォフと伊藤がハルビンで会談することになった経緯を考察する。第 3 章では、暗殺前後の様子をロシア側の視点から詳述する。第 4 章では、暗殺事件が日露関係へ投げかけた波紋について論じ、双方のわだかまりがとけるまで

を描く。

なお当時のロシアで用いられたユリウス暦は、20世紀に西暦と13日のずれがあり、本論では西暦に直して用いた。ただし、原史料をそのまま引用する場合や、脚注での新聞の日付などはユリウス暦のままである。また日本語引用文は原文のカナをひらがなにし、適宜句読点を補った。引用文中のカッコ内は筆者の注である。「満洲」の表記については中国東北とし、原文にある場合はそのままとしている。他の地名については、奉天は瀋陽とするなど現在の呼称を用いた。なお、日露双方の在外公館は1908年5月に公使館から大使館へ、使臣も公使から大使へ昇格しており〔ロシア史研究会（編）1993：313〕、本稿もその変遷に合わせて表記している。

2. ハルビンにおける会談の設定と両国の思惑

2.1. 会談の設定

すでに大野^{かおる}芳が指摘したように、伊藤とココフツォフの会談が設定された経緯は、日露双方の記述が大きく食い違っている。伊藤の側近が編集した伝記では、後藤新平通信大臣兼鉄道院総裁が伊藤との会談を希望する旨をロシア側に打電したところ、「ココフツォフは之を快諾し、自ら東洋視察の名義でハルビン^{ハルビン}に来ることを約した。公が先づハルビンに向かったのはかういう予定があったからである」〔小松（編）1928：3：209-210〕と、あたかもココフツォフが伊藤との会談のために極東視察に出かけたように書かれ、日本ではこれを真に受ける人もいる。しかし、ココフツォフは亡命後に出版した自伝で、伊藤との会談は現地に着いてから急に知らされ、サンクトペテルブルグではこのことを誰も承知していなかった、としている。彼によれば、ドミートリー・ホルヴァート中東鉄道管理局長がココフツォフを出迎えるためにハルビンを発つ日に、川上俊彦ハルビン総領事が会談を申し込んで知らせた。ココフツォフ本人がそれを知ったのはホルヴァートの出迎えを受けた、露清国境の満洲里駅でのことだった、という。そのため「このことを知らせる電報を見せられて非常に困惑した。なぜなら朝鮮^{朝鮮}総督をつい最近まで務めていた功績の多い老いた元老が、彼にとっては楽ではない旅に出て、単に訪問しにやって来るとは全く想像できなかったからだ」〔Кокочов 2004：332〕（注9）。ココフツォフは伊藤の突然の来訪の真意が読めず戸惑った、というのが彼の主張だ。またここには、ただごとではない、という畏怖すら感じられる。後述するが、ココフツォフが満洲里に到着したのは10月22日なので、会談の4日前に初めて彼は知らされたことになる。一方、ココフツォフに伊藤の会談希望を伝えたとされるホルヴァートによれば、日本側からの通知はもっと遅く、ココフツォフがハルビンに滞在した時に伊藤から会談希望の連絡があった、と回顧している〔Khorvat：chap. 9, p. 1〕。結論から言うと、これら日露双方の記述はどれも正確ではない。

伊藤にハルビン行きを勧めたとされる後藤は、前年にサンクトペテルブルグを訪問してココフツォフとも会談している。伊藤之雄によれば、後藤は1909年8月に伊藤にココフツォフとの会談を勧め、「極東問題、特に韓国の処理について、あらかじめ日本の方針を暗示しておいてはど

うかとも、伊藤に提案した」[伊藤 2009 : 564]。伊藤の使命については後述するとして、この時期が8月とされているのは早すぎる。ロシア側の史料によれば、後藤は9月23日付でココフツォフへ電報を送り、極東訪問の際には日本へもお越し願いたい、首相の桂太郎もお近づきになることを望んでいます、と要請した。しかしココフツォフは予算編成で多忙なことを理由に、翌日この依頼を丁重に断っている [РГИА, Ф. 323, Оп. 1, Д. 712, Л. 6-7]。一方、伊藤は9月29日に桂首相と会談して旅行計画を伝え、翌日にも桂に、イギリスがこの旅行についてどう考えるか、探るように依頼している [春畝公追頌会 (編) 1965 : 857]。これらを総合すると、ココフツォフを日本へ招請できなかつた後藤が、9月下旬にハルビンでのココフツォフとの会談を伊藤へ打診し、彼が応じた、と推測される。事件後の10月29日の『読売新聞』に、「伊藤公が満洲視察を思立したのは去月中旬頃のこと、当時近親の人々は何れも諫止したが^{つい}竟に聴容れず、到頭去月下旬桂邸で卒倒した日 (9月29日) に断然決定した」[『隣の噂』『読売新聞』1909年10月29日 (11651号) : 2] とあるのは、それを裏付けよう。

では、伊藤の会談希望は、どのようにロシア側へ伝達されたのだろうか。2009年から外務省が公開した「来往電綴」には、10月8日発の本野一郎駐露大使の興味深い電報が残されている。「露国大蔵大臣は本月13日^{モスクワ}莫斯科発にて哈爾濱^{ウラジオストク}浦塩等視察の途に上り、哈爾濱には24日より4日間滞在し同市施政問題を実際に講究する積にて、日本総領事共面会したき旨本官迄話ありたる」[外務省外交史料館「来往電 348」: 8338]。文中の「共」をどう解釈するかであるが、この電報が打たれた時には、ココフツォフはすでに伊藤の会談希望を知っていて、川上総領事「共」会談したいと希望した、とすることもできる。一方、川上の事件後の報告書では、「伊藤公爵当地来遊の公電 (10月8日) は10月9日当館に接到し、本官は其翌10日恰も東部西伯利亞及北滿洲各地の視察を了へ帰任したるを以て、御訓電に基き直に公爵迎接に関する準備に着手したり」(外務省外交史料館「伊藤公爵遭難顛末」『伊藤侯爵滿洲視察一件』2巻 : 4門2類5項245-5号、以下「顛末」と略記) と、10月10日から準備し始めた、としている。川上の記した日付は、他の在外公館が外務省から通知を受けた日時とも合致する (注10)。各国の使臣への打電前には、ロシア側に伊藤の会談要請が伝えられ、承諾を得ていたのではないか。これに加えて、伊藤は出発前にニコライ・マレーフスキー=マレーヴィッチ駐日大使と会談を重ねていた。後で詳述するが、10月11日付の大使の秘密電報では、伊藤のココフツォフ蔵相との会談希望が外務省に伝えられている [Маринов В.А. 1974 : 69]。ココフツォフのサンクトペテルブルグ出発は10月12日である。出発間際に彼が伊藤の会談希望について知っていたと考えるには、今のところ状況証拠が積み重ねられるだけで決め手に欠ける。ただし、上記の日付からも分かるように、日本側で言われるよりも、会談はかなり急に設定されたものであったことは確かである。一方、蔵相の極東視察は伊藤の希望が伝達される前から決まっていたもので、別の目的があった。

2.2. ココフツォフの目的

それならば、ココフツォフは何のために視察に赴いたのか。原暉之によれば、ウンテルベルゲ

ル沿アムール総督が出した建議が、「スホムリーノフ陸相の支持するところとなり、閣内では対日接近派のココフツォフ蔵相とのあいだに一種の亀裂が生じたことから、その修復のため皇帝の直接介入により計画された」[原 2003 : 18-19]、という。一方モロジャコフは、ウンテルベルゲルが日本の危険性に対して警告を発していたこと、そしてスホムリーノフが沿海州の防衛強化に国費を惜しんでいる、と申し立てていたので、皇帝ニコライ 2 世がココフツォフに現地視察を命じた、とする [モロジャコフ 2009 : 42]。当時のロシアの内情を知るために、この経緯をもう少し掘り下げよう。

1906 年 3 月にロシア極東の行政の要である沿アムール総督に着任したウンテルベルゲルは、就任当初から日本が再び戦争を仕掛けてくる、という再戦論を前提に地域政策を推進した。「日本の来るべき戦争の目的は太平洋岸からロシアを撃退し（中略）、北韓国境から北氷洋岸までの広い地帯を領有することにある」[原 2003 : 8]、と彼は見ていた。そのため日本との緊張緩和は見せかけにすぎない、と繰り返し政府に報告していた [William C. Fuller Jr. 1992 : 423-425]。政府の中で、彼の見解を支持していたのがスホムリーノフ陸相である。陸相はココフツォフが極東視察中の 1909 年 10 月 18 日にも、ピョートル・ストルイピン首相に、「目下のところ最も攻撃的な敵は日本とオーストリアです」[В.А. Сухомлинов - П.А. Столыпину 5 октября 1909 г. // РГИА, Ф. 1276, Оп. 5, Д. 608, Л. 1] と書き送っている。一方、イズヴォリスキー外相は 1907 年の第一次日露協約締結後のインタビューで、日本はあと 10 年間ロシアに対して攻勢に出ることはないだろう、と語っていた [Игнатъев А.В. 1986 : 178]。伊藤が暗殺された後も、日本は脅威ではないという認識を変えず、1909 年 11 月 22 日にスホムリーノフに宛てた手紙では、日本の軍事力強化は認めたが、その仮想敵がロシアであるとは言い難い、と強調した [シュラトフ 2010 : 57]。外務省と陸軍の対日評価は正反対だった。

対日警戒派と協調派の対立は、1909 年に国防問題をめぐって激しくなっていた。第一に焦点となったのがウラジオストク要塞への補助費である。ウラジオストクがその戦略的な重要性から軍事要塞に格付けされたのは 1889 年である。日露戦争後には要塞の廃止が検討されたが、スホムリーノフ陸相は存続は当然のこととして、逆に日本側からの攻撃の可能性に備えた要塞の強化に予算が十分につけられていない、とココフツォフを非難していた [Епифанова Л. 2003 : 544]。また中東鉄道警備隊の軍縮問題でも彼らは対峙していた。ココフツォフ蔵相は 1909 年 4 月 27 日に開かれた大臣会議で、その兵力削減を提案した。およそ 2 万 9000 人で構成される警備隊は、年間 1000 万ルーブル近くの維持費を中東鉄道が担っており、経営面で負担である、という理由による（注 11）。反対にまわったのがウンテルベルゲル総督とスホムリーノフ陸相である。彼らは、日本がロシアに対して攻勢に出る場合、朝鮮から沿海州に攻め上がるか、満鉄と中東鉄道の接続駅である寛城子から北へ攻め上がる二つのルートが考えられるとして、後者の防衛には兵力の維持が必要だ、と主張した [РГИА, Ф. 1276, Оп. 26, Д. 91, Л. 1-3]。結局、ココフツォフの提案は退けられた。いずれの問題でも、日本の軍事的脅威に対し極東の防衛をどう強化すべきか、という危機感が浮かんでこよう。これが、先行研究で強調されてきた対日脅威問題である。

しかし、ココフツォフの極東視察の目的はこれだけではなかった。彼が皇帝に提出した視察の復命書によれば、もっと広範な目的が開陳されている。それは、第一に中東鉄道とその警備隊の現状について、第二に極東における外国製品の自由な流入の廃止の影響（自由港制の廃止）について、そして第三が上述した東方の国防に対する政府の支出問題であった [РГИА, Ф. 1276, Оп. 28, Д. 1128, Л. 1]。第一点と第二点については説明が必要だろう。第一点は中東鉄道の財政問題が絡んでいる。中東鉄道は創業以来赤字が続いており、国庫からその補填が続いていることについて、^{ドゥーマ}下院で蔵相への批判が高まっていた。そのため、ココフツォフは極東視察の途上のモスクワで講演した際にも、今回の視察の目的が中東鉄道の問題にある、と述べた [Маньчжурец 1910 : 11-12] (注 12)。前述した警備隊の削減問題も鉄道の赤字削減のための方策であり、ココフツォフは下院の批判に対抗するために、現地の様子を知悉しておく必要があった。第二点もロシアの内政問題である。沿アムール地方は長らく外国製品の関税なしでの輸入を認める自由港制をとっていた。この制度は日露戦争前にはイギリスの圧力を受けて大連に適用され、代わりに沿アムール地方では廃止された [麻田 2008 : 190-191]。戦後、ロシアは大連を日本に譲り渡したため、改めて沿アムール地方に導入されたが、外国資本を利する、という理由でココフツォフがイニシアティブを発揮して、1909年1月に自由港制は撤廃されたのである [Беляева Н.А. 2003 : 140-147]。日本側の来日要請を断ったことから分かるように、ココフツォフの視察の目的は外交ではなく、内政上の課題の解決を図ることに重点が置かれていたことが確認できよう。

2.3. 伊藤の使命

一方、伊藤の使命は何だったのだろうか。彼は10月11日に首相官邸で開かれた国際新聞協会招待会の席上で、「^{いよいよ}愈々自分一個の思立にて哈爾賓迄旅行を試みむと欲す（中略）。諸君の土産になる如き獲物無きを今より断り置く。此の如き一個の漫遊に過ぎざるものを、万一にも政略的旅行^{など}杯と他より誤解せらるるに於ては、迷惑此上あるべからず」 [小松 1927 : 2 : 532]、とあくまで個人的な「漫遊」であるとマスコミに強調し、その目的を公にすることはなかった。

しかし各国はその意図を様々に憶測していた。マレーフスキー＝マレーヴィッチ駐日大使は、伊藤が大磯から出発した10月14日付の秘密電報で、「伊藤の満洲訪問は当地では重要な政治的意味を持つ」 [Н.А. Малевский-Малевич - А.П. Извольскому 1 октября 1909 г. // АВПРИ, Ф. 150, Оп. 493, Д. 171, Л. 154] と注意を促し、伊藤は今回私人として訪問するけれども、出発前日には御前会議で閣僚と協議していた、と外相に打電している。とは言え、この電報では瀋陽で伊藤と清国側が話し合うであろう内容に関心が向いている。具体的には、第一に中国東北における日本の国立銀行の設置、第二に1909年9月に結ばれた満洲及び間島に関する日清条約に関して（特に領事館の設置）、第三に松花江における日中合弁の汽船会社の設立が話し合われる可能性が高い、と報告した [АВПРИ, Ф. 150, Оп. 493, Д. 171, Л. 156об]。この電報には日露関係に関する言及はないが、その理由として伊藤の会談目的が後述の10月11日付の電報で自明であったためであろう。

伊藤のハルビン訪問に関心を持っていたのはロシアだけではない。清朝は伊藤の訪問で、中東

鉄道が持つハルビンと長春間の路線がロシアから日本へ引き渡されるのではないかと、と恐慌を来し、その会談の目的を探り出そうとやっきになっていた。東三省総督の錫良などは中東鉄道も満鉄も買い戻すことを主張していたから、日露がこの件で妥結すれば買い戻しが難しくなるのは明白だった [Hunt 1973: 212]。イギリスのマックス・ミュラー駐清公使も、1910年1月のロンドンの外相への年次報告で、長春の寛城子駅からハルビンまでの路線の譲渡をロシアに要求することが目的の一つだったのだろう、と書いている。しかし、公使の見方では、中国東北における日露の利害調整が一番重要で、その点についての意見交換が最もありそうなことだった、と報告している [Nish (ed.) 1993: 128]。

では実際のところ、その会談目的は何だったのか。事件後の11月21日に会談を仲介した後藤がロシアの駐日大使に明かした三つの実務的な使命については、すでにシュラトフや石が簡単ながら紹介している。それは、第一に満鉄と中東鉄道の連絡の改善、特に寛城子とハルビン間の列車の運行について。第二に中東鉄道とシベリア鉄道を經由してロシアに輸入される日本産の生糸の運賃低減について。第三に収用地（満鉄での名称は付属地）における中国人を対象にした日露両政府の共同行動の確立、である [Н.А. Малевский-Малеви́ч - А.П. Извольскому 8 ноября 1909 г. // РГИА, Ф. 323, Оп. 1, Д. 721, Л. 27]。こうした案件は後藤の抱えていた課題であって、伊藤が内に秘めていた会談目的とは違ったかもしれない。しかし手掛かりにはなりうるので、以下で詳述してゆこう。

第一点の満鉄と中東鉄道の連絡改善は、日露戦争後の両国の主要な外交問題の一つであった。ポーツマス条約第8条は「日本帝国政府及露^{ロシア}西亜帝国政府は、交通及運輸を増進し且之を便易ならしむるの目的を以て、満洲に於ける其の接続鉄道業務を規定せんが爲、成るべく速に別約を締結すべし」と定めており、当時も両国の交渉は続いていた。1909年6月にも中東鉄道のトップであるアレクサンドル・ヴェンツェリ中東鉄道副理事長（理事長職は1900年より空席）が訪日して、後藤と会談した。後藤はこの会談で、ハルビン、長春、大連間の急行列車の運行をスムーズにすることと、イルクーツクから長春まで、せめて一等客車だけでもハルビンで乗り換えせずにすむような列車の運行を求めた。その上で、もし直通急行が運行されるなら、ロシアの半官半民の汽船会社である義勇艦隊が大連と上海、または日本の港を結ぶ航路に就航するのを認める、と提案した。だがヴェンツェリは、列車の運行にはハルビンで現地業務を統括する中東鉄道管理局との協議が必要だ、と回答を保留した [РГИА, Ф. 323, Оп. 1, Д. 711, Л. 148о6-150о6]。後藤が伊藤に託したのは、この交渉に道筋をつけることだった、と思われる。

では、第二点の生糸の運賃低減とはどのような問題なのか。後藤の提案を受けて、12月にヴェンツェリ副理事長は詳細をココフツォフ蔵相に書き送っている。それによれば、中国や日本などからヨーロッパに輸出される生糸はスエズ運河経由が主流で、ロシアもフランスやドイツなど西ヨーロッパから生糸を買い付けていた。中東鉄道はこれに対抗して、シベリア鉄道を經由した生糸の輸送で利益をあげるべく、1906年から検討を開始していた。その際に輸出元となる満鉄と中東鉄道は会合を持ったり、輸出運賃を算出している。すなわち横浜から海路でマルセイユまで

運び、そこから鉄道でモスクワまで運ぶのには75日から90日を要し、生糸1ブード当たり4ルーブル60コペイカかかる。シベリア鉄道だと所要日数は30日に短縮できるが、生糸は1ブード当たり6ルーブル50コペイカかかる。そこで、シベリア鉄道経由のネックである運賃を海路より低くすることが課題となった〔РГИА, Ф. 323, Оп. 1, Л. 624, Л. 65-66об〕。生糸は当時の日本の主要な輸出品であったので、この問題は日本にとっても重要な意味を持っていた。

上記と比べると第三点は曖昧である。おそらく、これは当時勢いを増していた清朝の中国東北における利権回収に対して、日露が共同して対抗することを目論んだのだろう。特に、日露戦争に敗北したロシアは、清朝に対して守勢に立たされていた。1909年5月には中東鉄道の収用地における主権が清朝にあることを認めた条約が調印されている。清朝を後押ししたのは英米独で、ロシアの特権を認めず、中国東北の「門戸開放」を求めているのである〔中国社会科学院近代史研究所（編）2007：32-34〕。勢いに乗る清朝は、同年6月にロシアと中国東北における海関設置に関する協議も開始し、9月までにハルビンや松花江と黒龍江の沿岸に海関を設置した〔孫2005：162〕。こうした動きを横目で見ると日本は、利権回収の動きが満鉄に波及することを懸念して、列強の中で唯一ロシアを支持していた。しかし、日本が9月4日に「満洲及び間島に関する日清協約」を締結したことは、一種の裏切りとしてロシアの諸新聞を強く刺激した〔角田1967、573-574〕。その論調は日本の外交攻勢を責めるもので、清国と日本の接近を危惧するものもあった。9月20日にはイズヴォリスキー外相は本野大使に、小村外相による満洲六案件交渉の達成がロシアへの対抗を意図するものだ、とする世評が強くて、自分は困難な地位にある、と苦情を述べている〔千葉2008：212。Шулагов2008：173〕。伊藤はこうした誤解を解くと共に、ロシアと協調することを改めて表明したかったのかもしれない。

ここまでは第三者の語る話である。最も重視すべきは伊藤自身の発言であろう。10月11日付けのマレーフスキー＝マレーヴィッチ駐日大使の電報によれば、伊藤は出発前に大使へ次のように語った。

伊藤はハルビンで蔵相に会うことを熱望している。（中略）彼が言うには、公的な資格なしで行くけれども、中東鉄道と満鉄の協定と（両国の）商業関係の進展に関連して、日露のより緊密な関係（構築）が可能かどうか明らかにするため、この視察と、特にココフツォフ閣下との会談を利用したい、とのことだった。会談の続きで、彼はロシアに対する自らの変わらない友好的な感情を約束し、彼の見解では、いま中国で列強の相互の利益が衝突してしまっている極東での諸事業については、（日露）両国の緊密な協力が必要である、という考えを披露した〔Пак1999：25-26〕。

この電報からは、伊藤がココフツォフとの会談で日露関係をより深めたい、と考えていたことが分かる。また伊藤は朋友の井上馨に、旅行に際しては日清両国の親善と共に「露国蔵相とも会って相互の親善を図る」〔角田1967：446〕と語っていた。前述したように、いわゆる間島協約によっ

て「日露関係は依然として微妙であった」[千葉 2008 : 212] ことを考えると、伊藤がその改善を望んでいたのも不思議ではない。伊藤の使命は、後藤から託されていた区々とした案件もあったろうが、日露関係の進展という漠然としたものが主眼であった、と考えると良いだろう。そのためには、両国の利害が重なり、ある時はぶつかる、中国東北での利害の調整が必要であった。前記とは別の出発前の会見で、マレーフスキー＝マレーヴィッチ駐日大使が「私の見方だと、満洲はいま日本政治の焦点となっていますね、と言うと、伊藤公爵は exactly (その通りだ)、と力を込めて表明した」[マリノフ 1974 : 78]。事件後、駐日大使は、ロシアとの友好関係の促進に政府は出来る限り配慮せよ、と明治天皇が発言したのを受けて、伊藤が「満洲案件」を片付けるために向かった、という「極秘情報」を報告している [Копия секретной телеграммы Гофмейстера Малевскаго-Малевича. Токио, 2/15 декабря 1909 г. №276. // РГИА, Ф. 323, Оп. 1, Д. 721. Л. 68.]。

3. 事件前後の動向

3.1. ハルビン駅へ

ココフツォフが懸案としていた 1910 年度予算は、10 月中ごろに成立した [«Телеграф и телефон» // Московская Ведомость. 1-го Октября 1909 г. №224 : 2]。おそらく予算編成に目途をつけた直後だったのであろう、ココフツォフがサンクトペテルブルグを発ったのは 10 月 12 日である [«Разная известия» // Новое Время. 30-го Сентября 1909 г. №12052 : 4]。中東鉄道から差し向けられた列車には、大蔵省の官僚の他にヴェンツェリ中東鉄道副理事長などが随行していた。「満洲里駅までの旅は、疲労したあとの私には最も心地よい休暇であった」[Кокцов 2004 : 328]、とココフツォフは述懐している。10 月 22 日深夜に列車は露清国境の満洲里駅に到着し、ホルヴァート中東鉄道管理局長と、中東鉄道警備隊を指揮するニコライ・チチャゴフの出迎えを受けた [«Прибытие в Маньчжурию министра Финансов статс-секретаря В.Н. Кокцова» // Харбинский Вестник. 10-го Октября 1909 г. №1685 : 2]。その後は海拉爾と博克図を視察して、ハルビンに到着したのは 10 月 24 日の朝 9 時半である。プラットフォームではハルビン市議会の代議員や中東鉄道、露清銀行などの地元の高官に迎えられた。そして整列する中東鉄道警備隊の兵士の前で、彼らに対する皇帝の感謝の意を伝えると、「万歳」と讚美歌が沸き起こった。駅の周辺では朝から大勢の群衆が彼を待ち受けていた。ココフツォフの一行はその中を騎馬隊に護衛されながら、中東鉄道警備隊の兵士が整列する大通りを登り、新市街にある聖ニコラエフスク教会へ向かった [«Прибытие в Харбине Министра Финансов статс-секретаря В.Н. Кокцова» // Харбинский Вестник. 13-го Октября 1909 г. №1687 : 3]。翌 25 日には中国側やロシアの文武官の訪問を受けたあと、大蔵省が管轄するハルビン商業学校を視察し、女子部の設立を約束している。1906 年のイヴァン・ポポフ前蔵相以来の大蔵省高官の訪問ということで、ハルビンはある種のお祭り騒ぎの様相を呈していた。家々や大通りには、ロシアの国旗の他に、ココフツォフのイニシャルである「В・Н」の旗や電飾が飾られて、華やいでいた [«Хроника» // Харбинский Вестник. 13-го Октября 1909 г. №1687 : 3]。

一方、ハルビンの日本総領事館は伊藤の歓迎の準備に追われていた。川上総領事は大連に到着した伊藤の一行と連絡を取って詳しい旅程を問い合わせ、中東鉄道と協議して長春へ特別列車を差し向けることにした。10月14日には臨時居留民会を開いて歓迎委員を選挙し、伊藤がハルビンに到着した翌日には総領事館で官民合同の一大歓迎会を開催することを決めた。在ハルビンの邦人は、今後の彼の後援を期待して待ち受けていたのである [外務省外交史料館「顛末」]。伊藤のハルビン滞在はわずか3日間の予定だったが、日清露当局の歓迎行事が目白押しで企画されていた [佐藤 1927: 40-42]。日本側が準備に追われる中、伊藤のハルビン訪問を予告する記事が、事件当日の10月26日付けで中東鉄道の半機関紙『ハルビン報知』に掲載されている。記事は伊藤の経歴と今回の旅程を紹介しており、日本の改革者として、そして1902年のサントペテルブルグ訪問 (実際には1901年11月) に見られるように、ロシアとの友好を求める政治家として、好意的に報じた。「我々には伊藤侯爵 (実際には公爵) をようこそ! (добро пожаловать!) と、ロシアの昔からの歓迎の挨拶で迎える十分な準備がある」 [«К приезду маркиза Ито» // Харбинский Вестник. 13-го Октября 1909 г. №1687: 2]、と記事は結ばれている。

その伊藤の旅についてもふれておこう。彼は10月9日に宮中に参内して暇乞いをした [宮内庁 (編) 1975: 285-286] (注13)。桂首相との打合せもそうだが、伊藤が望んだとしても、元老にして枢密院議長の旅が私的な「漫遊」にはなりえなかった。10月14日には神奈川県大磯の自宅を出発し、会談前日の25日に長春に着いている [伊藤 2009: 567-569]。ここで、伊藤はまさに致命的な判断を下す。長春の寛城子駅では満鉄から中東鉄道へ乗り換えなければならない。長春駅までは関東都督府が「殆ど強請的に」付けた憲兵が護衛していたが、彼は「既に他邦の領土に入らんとす、何すれぞ自国警察を随ふの要あるべき、是れ寧ろ露国の警察権を蔑視するものに均し」 [『東京朝日新聞』1909年10月30日 (8334号): 2] と、ここから先の警護を断ったのである。都督府の警視総長は何度も抗議して私服憲兵の随行を求めたが、聞き入れられなかったという。このエピソードは、伊藤が身に迫る危険を感じていなかったのと、ロシア側に遠慮していた様子が窺われて興味深い。伊藤たち一行は長春で中東鉄道の面々の出迎えを受け、用意された特別貴賓車でハルビンへと向かった [外務省 (編) 1961: 197]。

3.2. 事件当日

伊藤に同行した医師の小山善によれば、会談の行われた10月26日火曜日は「実に厭な天気で、薄暗い程曇って、今にも雪が降り出しさうな陰鬱な空模様」 [小松 (編) 1927: 3: 293] だった、という。会見場所となったハルビン市は、中東鉄道の敷設によって19世紀末に誕生した街であり、行政まで鉄道が差配する「企業城下町」であった。中東鉄道の経営はロシアの大蔵省が握っていたので、この街で会見が行われたのは自然な成り行きである。

現地時間の午前9時、ハルビン駅に伊藤を乗せた列車が到着した。プラットフォームにはロシアと清国の儀仗兵が軍楽隊と共に整列していた。すでに一時間前から待ち受けていたココフツォフは、イヴァン・コロストヴェツ駐清ロシア公使、ヴェンツェリ中東鉄道副理事長、ホルヴァー

ト中東鉄道管理局長を従えて、伊藤の列車に赴いた [«Убийство маркиз Ито» // Харбинский Вестник. 14-го Октября 1909 г. №1688 : 1]。車内での会話は、通訳に当たった川上総領事が記録している。話しかけたのはココフツォフである。「衷心より閣下の御安着を祝す。而して今日自分が図らずも日本帝国の元勳たる公爵閣下は、偶然旅行中に相見ゆるの機会を得たるを欣喜し、且つ深く光栄とす」[外務省外交史料館「顛末」](注14)。伊藤は、「自分は今回満洲漫遊を思立て急遽東京を出発したる次第なるか、其出発前一日恰も閣下の極東巡視の事を耳にし、衷心閣下と相見へしことを希望し居たるに、今日茲に素懐を達することを得たるは、最も欣幸とし且光栄とする所なり」[外務省外交史料館「顛末」]と答えた。この期に及んでも両者が偶然の出会いを装っているのは滑稽ですらある。なぜここまで偽装しなげればならなかったのかは推測による他ないが、関係各国の疑惑を防ぐ処置だったのかもしれない。その後に車内で続いた会話は踏み込んだものではなく、ホームで出迎えている警備隊の兵を閲兵してほしい、というココフツォフの願いを容れて、伊藤は駅に降り立った。

暗殺の瞬間については、現場に居合わせた4人のロシア人がそれぞれ伝えている。次に掲げるのは、事件を最も間近で見たココフツォフが当日すぐに駐日大使に宛てた電報である。

本日午前4時9分（サンクトペテルブルク時間）、伊藤公爵は到着した車両から出て、儀仗兵の前を通り、私やロシアの代表者たちと共に市民や外国の領事たちの一団へ向かっていると、最後方の人々の背後からブローニング銃の銃声が数発響き、伊藤公爵は致命傷を負い、田中（清次郎、満鉄理事）は足に軽傷、川上総領事は命に別状はないが重傷、森（泰次郎、宮内大臣秘書官）も軽傷を負った。下手人は朝鮮人と判明し、逮捕された。尋問で明らかになったところでは、彼は公爵を暗殺するためにはるばるやって来たといい、自分の辱められた祖国のため、そして幾人が彼の親しい人々の処刑を公爵が命じたらしいので実行した、という。そして、幸いにも犯行は成功した、と言い添えた。

陰謀は明らかに組織的なものだった。昨晚、蔡家溝駅で我が警察はブローニング銃を持った3人の疑わしい朝鮮人たちをすでに逮捕していたという（以下略）[В.Н. Коковцов - Н.А. Малевский-Малевичу 13 октября 1909 г. // АВПРИ, Ф. 150, Оп. 493, Д. 171, Л. 175]。

駅構内からこの事件を見ていたロシア人のポポフは当時のハルビンの有力者だったが、32年後に満鉄社員へこう語っている。

伊藤公は愈々ホーム上を歩き始めて・・・第一に儀仗兵の整列して居る前方を右翼から閲兵を為し、終って其の左隣に居並ぶ外交団及び露清両国の官憲と各団体の代表者に答礼し、其所から踵を返して丁度現在のホームにある公の遭難地点記念柵の付近まで引返された時、突如私の並んでいる左側の儀仗兵の腕と腕の間から、黒のオーバーコートにシルクハットを被った一人の日本人らしい男が「バンザイ」と云うような声を出しました。

私は日本人が熱狂的に万歳を叫んで公を歓迎するのだと思ったが、其の瞬間バンバンと爆竹のはねるような音がしたら伊藤公は一寸止る様に直立するのも瞬く間に、長身を反らして倒れんとするところを、御供のココフツォフ蔵相はひるまず走り寄って、公の体軀を両手でしっかりと抱きかかえたではありませんか。そして公をしっかりと擁して列車の中に運んだのです [黒澤 1943 : 279-280]。

撃たれた伊藤は列車内に運び込まれ、ブランデーを含ませたり、カンフル剤の投与などの応急処置が施されたが、負傷から30分後に絶命した [小松 (編) 1927 : 3 : 211, 292]。伊藤の死が確認されると、ココフツォフは街のデパートのチューリン商会に赴いて、手ずから選んだ花を手向けた、という [Коковцов 2004 : 346]。ロシアの讚美歌「シオンにおわす我が主は何と偉大かな (Коль славен наш Господь в Сионе)」が伴奏される中、午前11時40分に伊藤の遺骸を乗せた列車は南へと去っていった。ロシア側からはホルヴァート管理局長やコロストヴェツ公使など11名が寛城子駅まで列車に同乗し、弔意を表した。皇族の礼遇で見送られた列車は、沿線各駅で警備隊の敬礼を受けたという [«Убийство маркиз Ито» // Харбинский Вестник. 14-го Октября 1909 г. №1688 : 1; 佐藤 1927 : 48-49]。青天の霹靂ながら、ロシア側は礼を尽くしたと言ってよい。列車が発つと、ココフツォフを筆頭とするロシアの高官たちはノヴゴロド教会に赴き、危険から守ってくれた神の加護に感謝の祈りを捧げた [«Хроника» // Харбинский Вестник. 14-го Октября 1909 г. №1688 : 2]。一方、伊藤の遺骸は大連から横須賀へ日本の軍艦で運ばれ、11月4日に明治天皇の勅命で、東京で国葬が執り行われた。伊藤のように元藩士の者の国葬は初であった [伊藤 2006 : 411]。葬儀の間、参列した各国の外交団とは別に、ロシア代表は特別席を設けられ、告別も皇族より先に許されるなど、特別待遇を受けた [Н.А. Малевский-Малевиц - А.П. Извольскому 22 октября 1909 г. // АВПРИ, Ф. 150, Оп. 493, Д. 171, Л. 171об]。ロシアへの配慮が滲み出ている。

最後にホルヴァートの回顧を見ておこう。彼はハルビンの事実上の「総督」であった。この回顧録はロシア革命後に執筆されたので、負傷した日本人名などに記憶違いが見られるが、犯人についての記述は最も詳しい。

発砲が二連発、しばらくしてさらに数発続いたとき、彼ら (伊藤とココフツォフ) は儀仗兵



写真 ハルビン駅構内にある、伊藤博文の暗殺場所を示す標識。3ブロック斜め先に、安が立っていた場所を示す同様の標識がある。2011年8月14日、筆写撮影。

のところまでまだ戻ってきていなかった。伊藤は最初の二発で致命傷を負い、間もなく亡くなった。程度の違いはあれ、あとの銃撃で重傷を負ったのは、川上総領事、田中満鉄商業部長、日本の宮廷儀典長の渡辺 [森泰次郎の勘違いか]、それに伊藤の側近一人である。この時、ニキフォーロフ憲兵大尉が銃撃している男に突進して覆いかぶさり、男を打ちのめして武器を取り上げた。暗殺者は朝鮮人のキリスト教徒でアンガイだと判明した。私が尋問したとき、彼はハルビンには昨日来て、駅や道端で夜を明かし、プラットフォームには日本の市民として入構した、と言った。しばらくのち、暗殺者が尋問されている部屋を訪れ、判事に伊藤が亡くなったことを報告すると、私の言葉を理解したアンガイはひざまずいて十字を切り、祖国への義務を全うすることに成功して私は幸せだ、と言った [Khorvat, 'Memoirs', chap. 9, p. 2]。

逮捕されたのは安重根^{アンジュンゲン}、日本による朝鮮半島の蹂躪に抗してロシアに亡命していた30歳の青年であった。『ハルビン報知』は、上記とは少し違う逮捕の様子を伝えている。ニキフォーロフに逮捕された際、安は「目立った抵抗を示すことなく、静かにリヴォルヴァー銃を渡した。伊藤が死にゆくのをみると、彼の口から不意に勝ち誇ったような『朝鮮万歳! (Ура, Корея!)』という叫び声が漏れた」[«Убийство маркиз Ито» // Харбинский Вестник. 14-го Октября 1909 г. №1688 : 1。«Убийство князя Ито» // Новое Время. 14-го Октября 1909 г. №12066. С. 2] と伝えている。当日、暗殺現場でカメラを回していたロシア人は、狙撃の際に「暗殺者は驚くような落ち着きぶりだった」[«Убийство маркиз Ито» // Харбинский Вестник. 14-го Октября 1909 г. №1688 : 1]、とも証言している。

事件現場に居合わせたもう一人のロシア人、コロストヴェツ公使が事件の翌日に外相に送った電報によると、彼の雄叫びは、「バンザイコリア」であったという [Пак 2009 : 112]。しかし、安自身はロシア語で3回叫んだことを日本側の裁判で証言している [佐藤 1927 : 82]。ロシア語であったなら、安が「観客」としてのロシア人を意識していることを示唆するエピソードとして重要であろう。ロシアの高官や領事団、そしてマスコミが一堂に介する衆人環視の現場は、「義拳」を世界にアピールするのに格好の舞台だった、と思われる。

3.3. 事件後の焦点

事件直後にココフツォフをはじめロシア側が気にしたのは、次の三点である。安の動機と背後関係、事件の責任者、そして日本のマスコミと世論の反応である。最後の点は次章で後述するとして、ここでは最初の二点を検証しよう。

事件後、安はただちにハルビンを管轄するポグラニーチナヤ（現在の綏芬河）管区裁判所の検事による取り調べを受ける。安の動機は自供から政治的なテロであることは明白であった。問題はその後関係である。ココフツォフが事件当日にセルゲイ・ヴェーベル大蔵次官に宛てた電報で問題としたのは、取り調べに対して、朝鮮の元山からウラジオストクを經由して真っ直ぐにやってきて、事件前夜にはハルビン駅のまわりで夜を明かした、と単独犯を匂わせる供述した点である。ココフツォフはこの供述を「真相を隠すための作り話」[В.Н. Коковцов – С.Ф. Веберу 13

октября 1909 г. // РГИА, Ф. 323, Оп. 1, Д. 712. Л. 79-79об] である、と信用しなかった。当日の 2 本目の電報では、安の弾丸と同じく、蔡家溝駅で逮捕された朝鮮人たちも切り込みが入った弾丸を所持していたことを論拠に、単独犯行説は覆された、書いている [В.Н. Коковцов – С.Ф. Веберу 13 октября 1909 г. // РГИА, Ф. 323, Оп. 1, Д. 712. Л. 80-80об]。こうした判断から、事件当日にはハルビンで朝鮮人被疑者の逮捕が始まり、9 名が安と共に裁判にかけられた [佐藤 1927: 71]。ハルビンでの逮捕を指揮したのはロシア側であったが、満鉄と中東鉄道の接続する寛城子駅では、ロシア側の収用地において、日本の官憲がロシア側に通告することなく被疑者の中国国籍者を逮捕し、ハルビンのロシア領事が川上総領事に、こうした場合の事前協議と中国側官憲の仲裁を求めて抗議する、ということもあった [Копия отношения Российского Генерального Консула в Харбине Управляющему Японским Генеральным Консульством в том же городе от 19-го Октября 1909 г. за №2451 // РГИА, Ф. 323, Оп. 1, Д. 712, Л. 97а.- 97а об.]。事件に関連する人物は一網打尽にしたかった日本側の、焦りの表れであろう。

問題の二点目は事件の責任問題、より具体的には安がなぜ駅構内に入りこめたのか、という点についてである。この点についてココフツォフは駅の入構管理の問題を指摘して、責任は日本側にあるとした。まず中東鉄道管理局が 10 月 21 日に日本の領事に対して入構許可証を誰に送ったのか知らせてほしい、と要請したのに対して、川上は許可証なしで日本人は当日自由に入出入りするようになる、と答えた。その上、10 月 22 日に入構許可証なしの自由な入場を川上が要請したことを、彼自身が認めている、と書き送っている [В.Н. Коковцов – С.Ф. Веберу 13 октября 1909 г. // РГИА, Ф. 323, Оп. 1, Д. 712.. Л. 79-80об]。この情報はおそらく川上と直接交渉に当たった中東鉄道管理局の外渉担当エヴゲーニー・ダニエルが蔵相に語ったのだろう。彼は検事の取り調べに次のように述べた。10 月 22 日早朝に彼の下へ川上総領事がやってきた。川上は在留邦人全員が伊藤と会うのを願っていること、しかし入構許可証を全員に送るのは難しいので、日本人には入構許可証の有無を質すことなくプラットフォームに入れるように頼んだ、と [Самойлов 1997: 239]。しかし川上は、11 月 22 日に小村外相に宛てて、ダニエルの主張は「殊更に事実を仮構し、本事件に関する鉄道警察官の責任を軽減せんとするの手段に非ざるやの疑なき能はず（中略）之か為め一般の疑惑を招くことありては、本官一個の立場として遺憾至極」[外務省外交史料館「伊藤公遭難顛末に関し露国蔵相より在東京露国大使に宛てたる電報の件」『伊藤侯爵満洲視察一件』別冊、4 門 2 類 5 項 245-5 号] と、否定している。真相がどちらなのかは分からない。しかし、ホルヴァートの回想録で安は日本人として入構したと語っていることから、入構の際の検査が日本人と思しき人物には甘かったのは否めないだろう。それとは別に、前日に蔡家溝駅で朝鮮人の不審者を逮捕しながら警戒態勢をとらなかったことも、大きなミスに思われる。

ところで、ウラジオストクやハルビンの朝鮮人たちは、安重根の裁判が死刑判決の予想される日本ではなく、ロシアで行われることを希望していた [Самойлов 1997: 240-241]。彼等の願いは届いたかには見えなかった。事件直後にポグラニチナや管区裁判所の検事は、中東鉄道の収用地内の朝鮮人の裁判権はロシア側にあると日本側を説き伏せ、日本の総領事館の書記官の立ち会いのもと、

事件当日の午前中にハルビンの裁判所で審理を開始した [Пак 1999 : 66-67]。しかし、10月30日に旅順の関東都督地方法院の検事の指揮のもと、安はロシア側から日本側に引き渡されて逮捕された [佐藤 1927 : 88]。和田春樹によれば、その法的な根拠は二点あった。第一に、1907年5月の林董外相の訓令により、日本が治外法権をもつ地域にいる大韓帝国臣民はすべて大日本帝国臣民と同様に取り扱われることになっていた。また、1907年2月のユーリー・バフメーティエフ駐日ロシア公使から林董外相に宛てて、中国東北のロシア軍占領地域において日本官民は治外法権をもっているの、犯罪をおかした場合、長春で日本側に引き渡されることになっていたのが第二点である [和田 1976 : 100]。この点についてロシア側でどのような議論があったのかは明らかではない。しかし当時中東鉄道に勤めていたソーコロフというロシア人によれば、川上が犯人を日本臣民と表明した、という [西原 1936 : 191] (注 15)。このことは、日本側の働きかけが重要だったことを示している。安は裁判ののち、1910年3月26日に旅順で処刑された。処刑は伊藤の月命日にあたり、検死官が安の絶命を確認したのも伊藤の絶命と同時刻だったといい、「象徴的な意味があったことがうかがわれる」 [戸田 2011 : 138]。遺族への引き渡しが許されなかった安の遺体は、2011年現在も埋葬地が不明である。国葬に付された伊藤との扱いの差は、当時の日本の姿勢を無言のうちに語っている。

一方、ココフツォフの視察は事件の影響を受けることなく続けられた。ココフツォフは翌日のハルビン市議会で、中国東北におけるロシアの施政方針演説をしたあと、ウンテルベルゲルと会談するためにハバロフスクへ向けて発った。この後はウラジオストクを経由し、11月11日にハルビンに戻ると、聖ニコライフスク教会で旅の無事を祈り、サンクトペテルブルグへの帰途についた [«К пребыванию г. Министра финансов статс-секретарь Коковцова в Харбине» // Харбинский Вестник. 15-го Октября 1909 г. №1689 : 1; «Хроника» // Там же. 16-го Октября 1909 г. №1690 : 2; «Хроника» // Там же. 25-го Октября 1909 г. №1695 : 2; «Отъезд г. Министра финансов статс-секретарь Коковцова» // Там же. 29-го Октября 1909 г. №1698 : 2]。彼が帰京後に皇帝に提出した復命書では、露清関係が順調でないことを述べた個所で、伊藤について一ヶ所だけ言及している。

水面下ではどうなのか私にはわかりませんが、表面的には、日本は我々に反対するように中国をけしかけてはおりません。日本の高官たちはむしろその反対のことを保証できる、といたします。日本と我々、そして中国との関係について、伊藤公爵にどのように秘めた意図があったのかは不明ですが、悲劇的な最後によってそれが実現できなかったのは、大変遺憾に思うのみであります [РГИА, Ф. 560 [Общая канцелярия министра финансов], Оп. 28, Д. 1128, Л. 38]。

4. 日露関係への事件の波紋

4.1. 対日警戒派の恐慌

この事件が日露関係へ及ぼした影響について、モロジャコフは次のように記す。「伊藤暗殺は、

ロシアで不安の混じった、心からの同情と哀悼の念を呼びおこした。悲劇は東支鉄道（中東鉄道の別称）の用地内で起こった。そこは中国から租借したものであっても、ロシア領とみなされていた。しかし、ロシア側との会見を準備した日本の領事は、事件を自分の責任と受けとめた。両国間の関係が悪化することはなかった」[ワシーリー 2009: 44]。川上は事件当日にロシアの検事による尋問を受けた際、ロシア側の事後処理に感謝の意を表明した [B.H. Коковцов - С.Ф. Веберу 13 октября 1909 г. // РГИА, Ф. 323, Оп. 1, Д. 712. Л. 81]。しかし前述したように、事件の直接の責任を認めただけではない。また事件後の日露関係も、円滑に進むまでには一混乱あったことを見てゆこう。

ロシアが警備を預かるハルビン駅で事件が起きてしまったことで、日本がこれを開戦の口実にするのでは、と初めは不安を抱いた、と沿アムール総督府の外交担当者は書き送っている [Шулагов 2008: 176]。彼の上司のウンテルベルゲル総督も同じ恐れにとりつかれていた。事件後にハルビンからロシア極東へと足を伸ばしてきたココフツォフを出迎えた際、この事件のせいで日本は数日後にロシアへ攻撃を仕掛けてくる、と彼はほとんどパニック状態だったという。だがココフツォフはウンテルベルゲルを説得し、その後日本の攻撃に関する彼の電報が送られてくることはなかった、とココフツォフは自伝で述べている [Коковцов 2004: 352]。しかしこれは事実と反する。ウンテルベルゲル総督が事件から4日後の10月30日に脱稿した「極東における我がが状況の深刻さ (Серьезность нашего положения на Дальнем Востоке)」と題する政府への極秘報告は、相変わらず日本の脅威を強調しており、具体的には日露戦争後も続く軍備の拡張と、ロシアとの国境を目指すかのように延伸される中国東北と朝鮮の鉄道敷設を問題視している [РГИА, Ф. 1276, Оп. 5, Д. 608. Л. 127-128]。この報告書と、それから続く電報を読んだイズヴォリスキー外相は、総督を強く叱責した。12月15日のウンテルベルゲル総督宛での電報では、政府や極東ではパニックが広がっており、特に極東では、将校は自分の家族をヨーロッパ・ロシアに送り返し、商店は店じまいをする始末である。この原因は、彼の報告書と新聞の「誇張された記事」であり、以下のようにウンテルベルゲルを論じた。

こうしたことは日本で逆にアジテーションを起こさせてしまい、この国と友好関係を維持してゆこう、という私の使命を難しくする。(中略)我々と日本の間には今のところ不和の原因となるようなものは全く見受けられない、とこの点につき私はもう一度繰り返しておく」[А.П. Извольский - П.Ф. Унтербергеру 2 декабря 1909 г. // РГИА, Ф. 1276, Оп. 5, Д. 608. Л. 216об] (注 16)。

しかし、閣内でもスホムリーノフ陸相は日本への警戒心を解かなかった。彼はイズヴォリスキー外相に、もはや日本との戦争が最終局面に入った、という認識を11月18日に示している。陸軍参謀総長や海軍大臣の同じような提言もあり、ココフツォフはしぶしぶウラジオストク要塞への補助金の支出を認めた [Шулагов 2008: 158-159]。だが、12月11日の極東政策をテーマにした閣僚会議で、イズヴォリスキー外相は日本との協力を更に深化させる方針につき、閣僚全員の

同意をとりつけた [シュラトフ 2010 : 57]。また、翌年になるとスホームリーノフ陸相の関心はしだいに清朝の軍事的台頭に向けられ、日本との中国東北の分割を模索してゆく。辛亥革命が起きた時、彼はその計画を実行に移そうとする [Marshall 2006 : 103-106]。が、それはまた別の話である。

4.2. 対日協調派の努力

一方でココフツォフは、日本のマスコミがどうこの事件を報道するのか気にしており、事件当日の電報で「外国のメディア、特に日本の事件の評価と、日本政府との関係を知らせてもらえるなら大変ありがたい」 [В.Н. Коковцов – С.Ф. Веберу 13 октября 1909 г. // РГИА, Ф. 323, Оп. 1, Д. 712, Л. 79об] と、サンクトペテルブルグに伝えている。駐日大使がまとめた日本国内の新聞の反応は次の通りである。事件の詳細が明らかではない段階で、日本の新聞数紙はロシアの道義的な責任と警戒心の欠如を非難した。ロシア政府が哀悼の意を表明したことと、事件の詳細が伝わってくるにつれ、世論は落ち着きを取り戻した。しかしその矢先の 10 月 28 日に悪い知らせが届いた。ハルビン駅の警官は公職にあるもののみを通していたにもかかわらず、犯人は日本人の団体にまぎれて入構した、との報道がなされたのだ。これが事実ならロシア側の落ち度は明白だった。大使はここで手を打つ。ココフツォフが大使に送った前掲の電報が 28 日朝に届くと、この英文要約を小村外務大臣に手渡すと共に、日本の新聞にも公表したのである。伊藤の傍らで事件を目撃したココフツォフの証言は重みがあり、世論を転換するのに役立った。以後、世論はロシア政府への謝意に傾き、何紙かは事件の影響で朝鮮問題の「解決」を遅らせることがないように書いている [Н.А. Малевский-Малевич - А.П. Извольскому 22 октября 1909 г. // АВПРИ, Ф. 150, Оп. 493, Д. 171, Л. 169об-170об] (注 17)。さらに、ココフツォフの電報は日本人の自由入構を主張した川上についてふれており、彼に責任がある、という印象も与えた。前述した川上の反論は、こうした報道に抗議するものである。日本での報道に関連して、イズヴォリスキー外相は 12 月 1 日の落合謙太郎駐露代理大使との会談で、日本の世論や新聞に不愉快なものがなかったのはロシアに対する好意の表れである、と解釈し、事件を反ロシアの扇動に利用しなかった日本のマスコミの姿勢を高く評価した [JACAR. Ref. B03030318400 : 38-39]。

ところで、第一章で触れた後藤が伊藤に託したとされる案件は、ロシアでは外務省も大蔵省も日露の連携を促すものとして、好意的に受け止めた [シュラトフ 2010 : 57]。さらに、本野一郎駐露大使は、イズヴォリスキー外相に日露同盟の締結を提案していた。これらを受けて、イズヴォリスキー外相は 11 月 25 日にニコライ 2 世に次のように上奏する。

現在は、戦前の状況を思い起こさせる。その時同じく伊藤が日本からの非公式提案を携えてわれわれのところへやってきた。今われわれへ呼びかけつつも、彼の呼びかけは銃弾で中断された。本野のこの声明は哈爾濱で伊藤が言うことができなかつたことを補っていると思われる [加納 2011 : 20]。

折しも、アメリカもロシアへの接近を図っていた。1909年10月2日には、モルガングループが出資して、イギリス企業が現在の遼寧省錦州と黒龍江省黒河を結ぶ錦愛鉄道の敷設を請け負う契約が、アメリカのウィラード・ストレート前瀋陽領事の仲介で結ばれた [Nearing and Freeman 1970: 45]。11月にはアメリカのフィランダー・ノックス国務長官が日本とロシアに中国東北での鉄道事業の中立化を申し込む。ノックスが目論んでいたのはロシアに接近することで日本を外交的に孤立させることであった [Hunt 1973: 209]。しかし、ニコライ2世は提案を蹴って日本との連携を選ぶ。12月1日には、イズヴォリスキー外相に「この提案につき日本と緊密な合意を遂げておくことを今ロシアが選択するのは、私にとって全く自明なことだ」 [Шулагов 2008: 181] と書き送った。ニコライ2世も、12月18日の駐日大使からの電報には、「後藤男爵の提案について蔵相と協議する。わが方からの良い返答は、近い将来にとりわけ好ましい意味を持つことだろう」 [Н.А. Малевский-Малевич - А.П. Извольскому 10 ноября 1909 г. // Ф. 323, Оп. 1, Д. 721, Л. 42] と、前向きな姿勢を見せた。結局、翌年の1月21日に、ロシアと日本は共同でアメリカの中立化案を拒否した。なおこの問題については、別稿で詳しく論じる予定である。

事件があったにも拘わらず、日本との外交関係が進展したことで、ロシア側の事件に対する見方は、不幸な事件だったものの大きな影響はなかったではないか、という楽天的なものになっていった。1917年のロシア革命後に駐日ロシア代理大使となるドミトリー・アブリコソフ (注18) は、当時外務省の本省に勤務していたが、回想録で次のように書き残している。「日露間の紐帯は強力だった。日露両国に対抗する計画はいかなるものも成功しなかった。(中略) 伊藤公爵がどんな目的で [会談を] 申し込んだのかは謎である。しかしそれがどうであれ、我々の日本との関係はますます緊密さを増し、失敗に終わった日本との戦争で失墜した我らの極東における地位は、再び強力なものとなったのだ」 [Lensen 1964: 179-180]。これは何も現場の外交官に限ったことではない。皇帝が1910年1月に新年の挨拶に訪れた落合代理大使に語りかけた次の言葉も、前向きな印象を与える。

伊藤公の遭難は甚だ不幸の出来事にして、右は日本にとり非常なる不幸なると同時に、また露国のため痛惜に堪えざる事件なり。ただこの事件以後、両国間には親密の感情を増し、右不幸な事件は ^{ひるがえっ} 翻て日露両国の関係に良好なる影響 ^{もたら} を齎したるものの如く、これがため両国善隣友好の関係日に増進しつつあるは、誠にこれ雨降って地固まるものにして、予の喜ぶ所なり [田中 1969: 159]。

ニコライ2世は伊藤と二度会っている。一度目は皇太子として来日した際に警官に切りつけられて負傷した天津事件のあと、伊藤が京都から神戸まで供奉した。1901年11月に伊藤がサンクトペテルブルグを訪問した際にも引見している [和田 2009: 414]。事件が心理的にどう影響したのかは論証の埒外だが、事件後に日露関係を進展させる決断を皇帝が下したのは確かである。その伊藤はロシア語が不自由だったが、中東鉄道の出迎えと事件前夜に車内で会食した際、「Я

люблю Русских（私はロシア人を愛している）」と、ロシア語でしばしば口にしていたという〔川上 1936: 191〕(注 19)。自らの暗殺で日露関係が損なわれなかったのは、ロシアとの友好に心を砕いた伊藤にとって、不幸中の幸いであったかもしれない。

不思議なことに、事件の関係者にはその後も譴責すら下ることもなく、ロシア側で安の取り調べに当たった検事たちは、1910年に日本政府から叙勲すらされている〔Пак 1999: 80〕。一方、ロシア側に名指して非難された川上は、「本官の職務執行上直接の責任なきが如きも、兇徒の計画を未然に探知し、予め之に應ずるの処置を執る能はさりしは、韓国人取締上の注意に於て遺憾」〔外務省外交史料館「来往電 348」: 8752〕であると、事件の3日後に辞職を願い出た。しかしこれは許されなかった。事件後、川上はロシアに責任を転嫁しなかったため、ハルビンでの評判は「日増に盛んに」〔西原 1936: 127〕なったという。彼は1912年にモスクワ総領事に転じるまでハルビンにとどまり、その後は満鉄理事や北樺太鉱業株式会社代表取締役会長など、ロシアとの交渉を必要とする要職を歴任している。ホルヴァート中東鉄道管理局長も処分を受けることはなかった。しかし、伊藤の後継者を自任していた桂が、1912年7月にサンクトペテルブルグ訪問の途上で中東鉄道を利用した時は、中東鉄道警備隊に総動員をかけて警護に当たらせ、皇帝の巡幸に準ずるような対応をとったという。この際、ハルビンに居住する朝鮮人は、ロシア側に徹底的に取り締まれた〔田中 1969: 244、255-257〕。ロシア側はテロの再発を極度に恐れていたのである。かくして、伊藤の暗殺は、暗殺者はいても責任者のいない事件として、曖昧に処理された。これが日露の暗黙の了解に基づく政治的決着であった、と考えるのはうがち過ぎであろうか。

5. おわりに

伊藤とココフツォフ、安重根の運命は、それぞれが初めて訪れた街ハルビンで交差した。本論ではハルビンでの会談に至る事前交渉と当日の経緯、その後の動揺の収束について詳述した。しかし、会談に至るまでの外交交渉については、史料の不足から本論でも十分明らかではない点がある。

第一に、伊藤の会談目的である。上奏文が残されているために、その極東訪問の意図が詳らかなココフツォフに比べ、伊藤がなぜハルビンへ行ったのかは、事前に出発を打合せた人々（明治天皇や桂太郎、後藤新平）以外にとっては謎であり、現在でも決定的な史料は出ていない。「伊藤公のハルビン訪問は、ある意味において、極東外交史の謎ともいえる」〔金 1972: 29〕、という言葉は、未だ真実を突いている。ただ、史料を読み解けば、巷間言われているように、朝鮮の問題が主題であるとは英露清の外交官たちは見ておらず、「満洲問題」が話し合われるだろう、と予想していたことがわかる。また、伊藤自身は、日露の友好の確立、ということを繰り返し周囲に漏らしていることを考えると、彼が「満洲問題」をどう解決しようとしていたのか、ロシアにどのような期待を寄せていたのかに、今後はより注目すべきであろう。

第二に、ロシア側が伊藤の会談希望をどの時点で知っていたのかについても、論者によって主

張は食い違ふ。おそらく、詳細を明確にするには、モスクワのロシア帝国外交史料館の一次史料のさらなる活用が不可欠であろう。しかし、どのような経緯で彼らがハルビンで出会うことになったのかについての経緯は、ロシア側の史料で多くのことが明らかになった。特に、ココフツォフにとって伊藤との会談は極東視察の「ついで」であって、伊藤が強い決意で会談に臨んだのと心情の落差があったことは、従来の見解を覆す。

ところで、日本では近年この事件を論じる際に、背後にいた「黒幕」探しが盛んである。「黒幕」探しはどのような暗殺事件でも多かれ少なかれ必ずつきまとうもので、これからも議論が止むことはないだろう。少なくとも、現場にいたロシア人たちは安重根が実行犯であることを疑わず、日本人の関与を唱えていないことは立証された。同様に、伊藤の暗殺に誰が責任を負うべきか、という問題を蒸し返すのも、事件から1世紀もたつ現在では不毛な議論と思われる。

むしろ筆者が着目するのは、この事件が当時の日露関係の「危うさ」と「強さ」を浮き彫りにした点である。事件の半年あまり前から、日露関係は双方に不信感があることから良好とは言い難いものになった。ロシアでは日本を警戒する軍人たちの意見が根強くなっており、中央政府とロシア極東の見解の齟齬も大きくなっていった。ココフツォフの極東訪問は伊藤との会談が目的ではなく、内政上の要求から行われたものだったが、日本の脅威も意識しつつ行われた。それは、ココフツォフが復命上奏文で伊藤の死についてふれた一文でもわかる。これが「危うさ」である。こうした中で起きた伊藤の暗殺は、ロシア側にとって青天の霹靂であって、第二次日露戦争の勃発を本気で心配する者たちもいた。特に、日本を敵視し、かつ怯えていた沿アムール総督府では、総督から下級官吏までそうした見方をとった。しかし、事件に際して日本政府が自重し、ロシア大使館が、日本のマスコミの論調をロシアの責任を問うものから朝鮮問題へ逸らすのに成功したことは、ロシア政府内の対日協調派にとって有利な状況を作りだした。ロシアの対日警戒派はこのあとも日本の軍事的な脅威を警告し続け、軍備を怠らなかつたものの、政府内で主流派となることはなかつたのである。こうした事件後の関係修復力が「強さ」である。

事件の責任追及を棚上げにした日露両政府は、双方の軍人たちが唱える日露再戦不可避論をいなしつつ、東北アジアにおける自らの権益の確保をより確かなものにするため、日露協定のさらなる強化に邁進してゆく。その具体的な成果は、伊藤が亡くなった翌年に第二次日露協約としてまとまった。そして両国の「例外的な友好」は、1917年のロマノフ朝の崩壊によって、日本がロシアを見限るまで続くことになる。幸か不幸か、伊藤の暗殺とその事後処理は、その礎の一つを築いたのである。

付記

本論は2010年度東アジア近代史学会大会（於国士舘大学）での報告に加筆修正を加えたものである。また本論は、日露交流センターの日露青年交流事業若手研究者等フェローシップ（日本人研究者派遣）と、平成22年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

なお、本論には間に合わなかったが、2011年12月にモスクワのロシア連邦国立文書館(Государственный архив Российской Федерации)で、ココフツォフ蔵相が帰京後にこの事件について上奏した、13ページの文書を発見した(Ф. 543. Оп. 1. Д. 304)。この文書には、伊藤との会話などについて、様々な新事実が含まれている。機会があれば、全訳して公表したい。

注

- (1) 紙幅の関係上、ここでは日本語文献のみあげておく[シュラトフ 2007: 183-207。シュラトフ 2010: 48-66。パールイシェフ 2008。モロジャコフ 2009]。
- (2) 次の一文が代表的である。「博文が統監を辞して枢密院議長となったのは、日韓併合の閣議決定の後であるが、この国策を遂行するため、彼は、まず韓国と接譲している露清両国の完全な了解を得ることが必要であるとし、その後に欧米諸国の了解を得ることにした。そこで、欧州行きに先立って満州に渡り、露国蔵相ココフツォフと、極東問題ことに韓国問題について交渉協議することとなったのである」[市川 1979: 167]。
- (3) 事件に「黒幕」がいて、安重根は犯人に仕立て上げられたのだ、と最初に唱えたのは、伊藤に同行した貴族院議員の室田義文である。その後、彼の回想録[田谷広吉、山野辺義智(編) 1938]を根拠に、「黒幕」探しの研究が最近は主流である。例として、次の文献[平川 1966: 101-135。上垣外 2000。大野 2003。海野 2004]。この中では、小説仕立てであるものの、大野の著書が会談前後の経緯に鋭く切り込んで出色である。ただ、室田自身は安重根の裁判では、次のように証言している。「数発爆竹の如き音を聞きたるも狙撃者ありしことを気付かず、少時して洋服を着たる一人男が、露国軍隊の間より身を出して、拳銃を以て自分の方に向ひ発射するを認め、初めて狙撃者あることを知り(中略)、狙撃当時の模様は是以外に知らず」[金 1972: 207]。安の発砲を認めた彼が、回想録で証言を翻したのは、疑問が残る。
- (4) ココフツォフ(1853-1943)はノヴゴロド生まれの官僚出身の政治家。1904年2月から1905年10月まで大蔵大臣を務め、1906年4月から蔵相に再任された。ストルイビン首相が暗殺されたのを継ぎ、1911年9月から1914年1月まで首相。革命後はフランスに亡命し、パリで没した[Шелохаев В.В. (отв. ред.) 2008: 121]。
- (5) イズヴォリスキー(1856-1919)はモスクワ生まれの外務官僚。1899年から1902年まで日本公使を務めた。1906年4月から1910年9月まで外務大臣。その後は駐仏大使を務め、亡命先のパリで没した[Шелохаев В.В. (отв. ред.) 2008: 105]。
- (6) スホムリーノフ(1848-1926)は騎兵出身の軍人。参謀総長を経て1909年3月から1915年6月まで陸軍大臣。1926年にベルリンで没した[Шелохаев В.В. (отв. ред.) 2008: 265]。
- (7) ウンテルベルゲル(1842-1921)は工兵出身の陸軍軍人。中央アジアでの勤務を経て、1905年から1910年まで沿アムール総督を務め、その後も要職を歴任する。亡命してラトビアの首都リガで没した[Шелохаев В.В. (отв. ред.) 2008: 291]。
- (8) ジョージ・レンセンは東アジアとロシアの関係史の第一人者で、1979年に不慮の事故で亡くなった。彼がモスクワで撮影したマイクロフィルムが、北海道大学スラブ研究センターに保管されている。
- (9) この回想録の初版はパリで1933年に出版された。英語版も出ているが、全訳ではなく摘訳である。[Harold 1935]。
- (10) 10月9日には小村外務大臣からロンドンの加藤高明大使や北京の伊集院彦吉公使、瀋陽の小池張造総領事などにも伊藤の大連からハルビンへの旅行計画が伝えられている。[外務省(編) 1961: 193]。
- (11) 中東鉄道の警備隊と工兵のザアムール鉄道大隊は、独立国境警備軍団外アムール管区として、国境沿いの密輸と密出入国の防止のために設けられた大蔵省直属の部隊に属していた。その指揮権は大蔵大臣にある。詳しくは、[麻田 2006: 81-94]。
- (12) なお、この匿名の筆者は『ハルビン報知』の編集長をつとめたプレイスマンであるという。[軍司 1943: 429]。ココフツォフ自身も、前年には中東鉄道の売却を検討し、逡巡していた[加納 2011: 18]。
- (13) 昭憲皇后が伊藤に与えたという次の短歌は、この前後のものであろう。「おいぬれど国の力とならむ人すくよかにこそあらまほしけれ」[佐々木 1929: 455]。また出発前日には、宮中から下賜品を携えた勅使が大蔵に下向している[「伊藤公に御下賜」『東京朝日新聞』1909年10月14日(8318号): 3]。こうした宮中の厚遇も、伊藤の「漫遊」が帯びていた公務としての性格を物語る。
- (14) ただし、田中清次郎満鉄理事がフランス語で通訳した、という異説もある[春叟公追頌会(編) 1965: 870]。

- 一方、事件当日に川上総領事が小村外相に送った電報には、「露国大蔵大臣は公爵を車内に訪ひ其『サロン』に於て本官を通して 30 分間対談あり」[外務省(編) 1961: 197]とあることから、本論ではこちらを採用した。
- (15) 「ソーコロフ」は、川上がハルビン総領事を務めていた時に中東鉄道民政部長だったと記されている。この経歴から、『ハルビン報知』の編集長も務めたセルゲイ・セルゲイヴィッチ・ソコロフであろう。彼の経歴は次を参照 [Хисамутдинов А.А. 2000: 288]。
- (16) ウンテルベルゲルの反日姿勢は終生のもので、すでに沿アムール総督を退任していた 1915 年にも日本への警戒を政府に説いている [パールイシエフ 2008: 109]。
- (17) ココフツォフの電報は 2 日後に一斉に報道された。例として、[[「露国蔵相の電報」『時事新報』1909 年 10 月 30 日 (9372 号): 3。「露国蔵相の報告 (兇變目撃の状況)」『東京朝日新聞』1909 年 10 月 30 日 (8334 号): 2]。
- (18) 彼の略歴は次を参照 [ボダルコ 2001: 98-99]。
- (19) 同じエピソードは、伊藤に同行したロシア側関係者からも披露されている [«Харбин, 14-го октября» // Харбинский Вестник. 14-го Октября 1909 г. №1688 : 1]。

参考文献

<一次史料>

Архив внешней политики Российской империи (文中では АВПРИ と略記。在モスクワ)
 Российский государственный исторический архив (文中では РГИА と略記。在サンクトペテルブルグ)
 外務省外交史料館
 アジア歴史資料センター (文中では JACAR と略記)

<ロシア語>

- Епифанова Л.* (ред).
 2003 Особые журналы Совета министров Российской империи. 1909 год. М.
- Коковцов В.Н.*
 2004 Из моего прошлого : воспоминания, 1903-1919 гг. Минск.
- Маньчжурец.*
 1910 Русская Казна на Китайской дороге. СПб.
- Маринов В.А.*
 1974 Россия и Япония перед первой мировой войной (1905-1914 гг.). М.
- Пак Б.Д.*
 1999 Возмездие на Харбинском вокзале. М.
- Пак Б.Д.*
 2009 Борьба российских корейцев за независимость Кореи. 1905-1919. М.
- Самойлов Н.А.*
 1997 Выстрелы Ан Чун Гына в Харбине : взгляд из России // Вестник Центра корейского языка и культуры. Выпуск 2, СПб.
- Хисамутдинов А.А.*
 2000 Российская эмиграция в Азиатско-Тихоокеанском регионе и Южной Америке. Библиографический словарь. Владивосток.
- Шулатова А.Я.*
 2008 На пути к сотрудничеству : российско-японские отношения в 1905-1914 гг. Хабаровск-Москва.
- Шелохаев В.В.* (отв. ред.)
 2008 Государственный Совет Российской Империи. 1906-1917. Энциклопедия. М.

<新聞>

Новое Время
 Московская Ведомость

Харбинский Вестник

『時事新報』

『東京朝日新聞』

『読売新聞』

<英語>

Alex Marshall,

2006 *The Russian General Staff and Asia, 1800–1917* (London : Routledge Curzon). Dmitri L. Khorvat, 'Memoirs', 原本はスタンフォード大学フーヴァー研究所所蔵。

George A. Lensen ed.,

1964 *Revelations of a Russian Diplomat : The Memoirs of Dmitri L. Abrikossow*, (Seattle : University of Washington Press)

Harold H. Fisher (ed.)

1935 *Out of My Past : The Memoirs of Count Kokovtsov* (California : Stanford University Press).

Ian Nish, (ed.)

1993 *British Documents on Foreign Affairs : Reports and Papers from the Foreign Office Confidential Print, part I, series E, Asia, vol. 14, Annual Reports on China, 1906–1913* (Basingstoke : Macmillan).

Michael H. Hunt,

1973 *Frontier Defense and the Open Door : Manchuria in Chinese-American Relations, 1895–1911* (New Haven, Conn. : Yale University Press).

Scott Nearing and Joseph Freeman,

1970 *Dollar Diplomacy : A Study in American Imperialism* (New York : Arno Press & The New York Times).

William C. Fuller Jr.,

1992 *Strategy and Power in Russia, 1600–1914* (New York : The Free Press).

<日本語>

麻田雅文

2006 「中東鉄道警備隊と満洲の軍事バランス——1897-1907年」『ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア (III)』北海道大学スラブ研究センター。

2008 「中東鉄道とダーリニー（大連）港の勃興——1898-1904年」『スラブ研究』55号。

2010 「日露戦争前後における中東鉄道収用地の形成と植民計画——満洲における特殊法域の誕生」『史学雑誌』第119編9号。

市川正明

1979 『安重根と日韓関係』原書房。

伊藤之雄

2006 『明治天皇——むら雲を吹く秋風にはれそめて』ミネルヴァ書房。

2009 『伊藤博文——近代日本を創った男』講談社。

海野福寿

2004 『伊藤博文と韓国併合』青木書店。

大野芳

2003 『伊藤博文暗殺事件——闇に葬られた真犯人』新潮社。

外務省編

1961 「伊藤公兇變二関スル件」『日本外交文書』42巻1冊、日本国際連合協会。

角田順

1967 『満州問題と国防方針——明治後期における国防環境の変動』原書房。

上垣外憲一

2000 『暗殺・伊藤博文』筑摩書房。

加納格

2011 「ロシア帝国と極東政策——ポーツマス講和条約と韓国併合まで」『法政史学』75号。

金正明

1972 『伊藤博文暗殺記録』原書房。

宮内序編

1975『明治天皇紀』12巻、吉川弘文館。

軍司義男

1943『東支鉄道運賃政策史』南満洲鉄道株式会社調査局。

黒澤忠夫

1943『白系露人』毎日新聞社。

小松緑編

1927『伊藤公全集』全3巻、昭和出版社。

佐々木信綱編

1929『明治天皇御製集・昭憲皇太后御歌集』改造社。

佐藤四郎

1927『伊藤公の最期』哈爾濱日日新聞社。

シュラトフ・ヤロスラブ

2007「朝鮮問題をめぐる日露関係(1905-1907)」『スラブ研究』54号。

2010「日露戦争後のロシアの日本観——外務省と軍部、中央と地方(1905年-1916年)」『ロシア史研究』86号。

春畝公追頌会編

1965『伊藤博文伝』原書房。原本は1940。

田谷広吉、山野辺義智編

1938『室田義文翁譚』常陽明治記念会東京支部。

田中文一郎

1969『日露交渉史』下巻、原書房。原本は1944年に外務省が刊行。

戸田郁子

2011『中国朝鮮族を生きる——旧満洲の記憶』岩波書店。

バルィシェフ・エドワルド

2008『日露同盟の時代、1914-1917年——「例外的な友好」の真相』花書院。

平川紀一

1966「伊藤博文の暗殺をめぐって」『工学院大学研究論叢』5号。

ポダルコ・ピョートル

2001「1917年10月革命後の日本在住ロシア外交官の生活と活動について」『ロシア史研究』68号。

石和静(金成浩訳)

2003「国際関係から見た日露協約と日本の韓国併合」『ロシア史研究』72号。

ロシア史研究会編

1993『日露200年——隣国ロシアとの交流史』彩流社。

原暉之

2003「日露戦争後のロシア極東——地域政策と国際環境」『ロシア史研究』72号。

千葉功

2008『旧外交の形成——日本外交1900-1919』勁草書房。

西原民平編

1936『川上俊彦君を憶ふ』。非売品。『日本外交人物叢書』第9巻として、2002年にゆまに書房が復刻。

ワシーリー・モロジャコフ(木村汎訳)

2009『後藤新平と日露関係史——ロシア側新資料に基づく新見解』藤原書店。

和田春樹

1976「日露逃亡犯罪人引渡条約付属秘密宣言書」『社会科学研究』27巻4号。

2009『日露戦争——起源と開戦』上巻、岩波書店。

<中国語>

中国社会科学院近代史研究所編

2007『沙俄侵華史』4巻下、中国社会科学出版社。

孫修福主編

2005『中国近代海関史大事記』中国海関出版社。

